

考古アラカルト31

特別展示 桃山文化の陶磁器 ～つちの中から～1

http://www.kyoto-arc.or.jp
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



洛中・伏見城下出土

洛中洛外図屏風をよく眺めると、町屋や商家が立ち並び、往時の繁盛する洛中の雑踏が身近に伝わって来ます。旅人や商人、武士の姿など、騒めきが具体的に目の前に現れるようです。発掘の成果は、洛中洛外図屏風ほどリアルではありませんが、見方によっては、洛中の町並みや人々の生活ぶりを知る生き証人にもなります。

遺跡には当時の人々が用いたものが「つちの中」に埋まっています。何らかの理由で破棄され、埋められたものです。それらを手順通り発掘すれば、当時の姿を復原することができます。

そうした桃山文化を特徴づける陶磁器が、伏見城下町跡や洛中の遺跡から大量に見つかりました。伏見城下町跡(京町七丁目)から

出土した志野水指や京焼黒茶碗は、茶の湯の隆盛を示すこの時代を象徴するものです。洛中の武家屋敷、豪商邸、町屋、寺院からは多彩な陶磁器が発見されています。

茶屋四郎次郎の邸宅跡

上京区小川通出水上る丁字風呂町著名な豪商の一人に茶屋四郎次郎がいます。邸宅跡の素掘り井戸から美濃や唐津などの茶碗が出土



金森屋敷の青花皿

しています。日常使いの茶碗のようにも思えます。

金森出雲守の京屋敷跡

中京区柳馬場通竹屋町下る五丁目
金森宗和の父である金森出雲の京屋敷跡から、中国製の六枚組の青花皿や呉須赤絵の大皿、瀬戸黒茶碗、青織部角皿などが見つかりました。色鮮やかなものが好まれたようです。

古田織部正の屋敷跡

中京区東堀川通錦小路上る四坊堀川町
17世紀初頭の醒ヶ井通の側溝から出土した、内面に桐文を描いた大型の青織部角皿が目目されます。屋敷地では、美濃、唐津、備前、信楽などの陶器が出土しています。

後藤庄三郎の邸宅跡

中京区烏丸通三条下る場之町
豪商の邸宅跡からは、京焼黒茶碗、瀬戸黒茶碗、黄瀬戸向付、志野茶碗、黒織部茶碗、織部向付、唐津茶碗などが出土しています。



茶屋四郎次郎邸跡出土



金森屋敷の青織部角皿

田中町

上京区下立売通千本東入る田中町
「二月十三日 慶長八」の銘がある黄瀬戸茶碗が出土しています。紀年銘のある黄瀬戸茶碗は、陶磁器編年の物差となっています。

大門町

上京区室町通榎木町下る大門町
志野茶碗・大鉢、織部向付・水注、唐津盃・注口付鉢・徳利、伊賀花生などが、炭、灰、焼土、魚骨、鱗、鳥骨、土師器皿などと混じって出土しました。武家屋敷のゴミ捨て穴と考えられます。

秋野々町

中京区烏丸通二条下る秋野々町
17世紀前後の濠状の遺構から青花碗・皿、白磁皿、天目茶碗、黄瀬戸向付、唐津沓茶碗、美濃菊皿などが出土しています。このあたりは町屋が集中しており、いわゆる「町衆」の持ち物として理解してよいでしょう。



古田屋敷の青織部角皿

楠町

中京区間之町通竹屋町下る楠町
「多従た可王毛ミち茶可連て奈可るめり 主たらはにしき 中やたへ奈ん」と底面に和歌を記すまれな青織部の向付が出土しています。

他にも洛中からは多量の桃山時代の陶磁器が出土しています。これらの事実は茶の湯が武家、豪商、町衆などに受け入れられ、洛中が陶磁器の最大の消費地であったことを示しています。

(永田 信一)



和歌が書かれた向付



後藤庄三郎邸跡出土